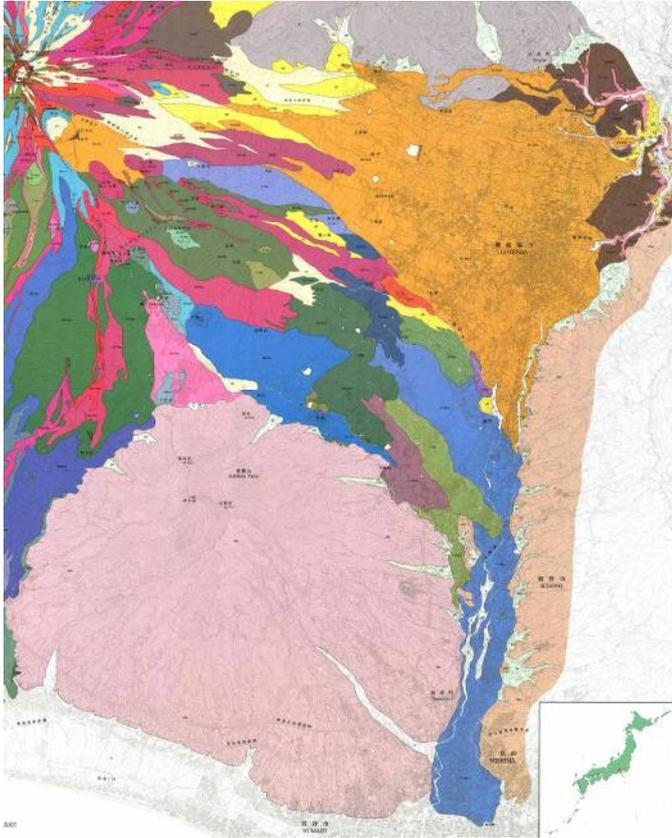


御殿場線は、その数奇な歴史も興味深いですが、地質的には大変興味深い地域に線路が敷かれています。



これは産総研の富士山地質図(部分/南東側)です。富士山は、中央火道のマグマによる「山頂噴火」だけでなく、マグマの枝道である側火道(そくかどう)から噴出した「側噴火(そくふんか)」と呼ばれる噴火を数多くした歴史があります。側噴火によってできた山腹の小さな火山は「側火山」または「寄生火山」と呼ばれています。富士山には100座以上の側火山発見されていて、単独の火山では世界最多のレベルです。

地質図というのは、主に地表に現れた岩石だけを表現しています。実際には土壌や人工物が覆っていますが、少し掘れば示された岩石に一番最初に当たりつくことを意味します。山頂からの溶岩流に加え、多くの側火山からの溶岩流が重なり合って、富士山の地質図は読図が困難なほど複雑に入り組んでいます。図の左上の溶岩流が放射状に集まっているところが山頂火口です。下半分の薄紫色の部分は富士山よりも古い「愛鷹火山(あしたかかざん)」の山体です。

目を引くのは、右上の扇形のオレンジ色の部分です。御殿場市の大部分はこのオレンジ色の部分に位置します。これは「御殿場岩屑なだれ堆積物」(略号 Sc-God)と呼ばれる地層です。これは約 2900 年前に起きた富士山東側面で発生した大規模な「山体崩壊」によって発生した、溶岩や火山碎屑物のなだれによる堆積物です。その厚さは御殿場駅付近でも 10 m にも達するといえますから、もし当時御殿場市付近に人が住んでいたら、全滅だったでしょう。この山体崩壊については、宮地・千葉他の論文(2004)に詳しいです。

愛鷹山の東側を巻き込むように流れ下っている、青く表示された溶岩流は「三島溶岩流」(略号 F-Msm)と呼ばれています。これは約 14,000 年前の溶岩流と考えられていて、富士山の溶岩流の中ではかなり古い部類に属します。驚くべきはその溶岩流の延長(長さ)です。大部分の富士山の溶岩は「玄武岩質」で、溶岩としては粘性が低く、遠くまで流下するのが特徴です。三島溶岩流も名の通り現在の三島市まで流下し、駿河湾に達したとする説もあります。

御殿場線も、駒門駅付近から、終点の沼津駅の手前まで、この三島溶岩流の上に敷設されています。広い意味では御殿場線の半分は「富士山の上」に線路があることになります。



これは、三島溶岩流の末端の一つ「鮎壺の滝(あゆつぼのたき)」です。左上に富士山が写っています。この溶岩流末端も、御殿場線「下土狩駅(しもとがりえき)」から、私の足でも徒歩数分でした。「JR 駅が一番近い滝」という宣伝は誇張ではありませんでした。溶岩の下には洞穴(溶岩樹型)も存在します。この下土狩駅そのものや、駅周辺の、歴史的・地質的な探訪記録は、後日改めてまとめたいと思っています。